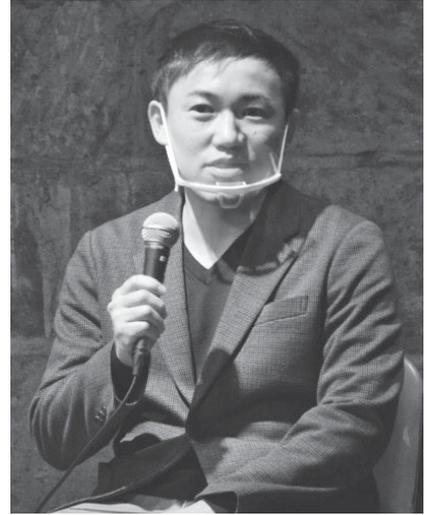


白老の魅力を語ろう！

戸田町長参加によるトークセッションで



自身の経営経験から白老の魅力を語る西尾青年部長

▼移住者だから分かる白老の魅力

私は厚真町出身ですが、だからこそ分かる白老の魅力も多いです。ベーカーリーを経営していますから、まずは良質な水ですね。特産物が多く、地元食材を使ったパン作りができます。期待が大きかった開業後、コロナ禍で商店街に当初予定していたにぎわいはありませんが、これからと思っています。商工会によるフォトコンテストは、「わがまちにこんな所があったのね」という写真がいっぱいです。やはり、恵まれたまなちです。コロナ禍は、気づかなかったまちの魅力を探る機会でもありますね。

このまちで長く商売を続けていかなければなりません。異業種によるコラボなども考えていますが、先ほど「地元」「近場」というキーワードが出ました。長期にわたっての良い視点だと思います。

そんなわけで、世界からの来館者の想定も今は道内の方が多く状況ですが、ポジティブに考え、地元の人に情報発信できる機会と捉えています。それもコロナ禍のコミュニケーションです。

ウポポイを取り巻く自然の素晴らしさに関して、来館された方はその景観に感動されています。皆さん博物館のパノラミックロビーから、ポロト湖やチセなど入れて皆さん写真撮ってから基本展示室に入っています。

ウポポイ、白老町を見学したロンさん

「とても、とても良かった」「感動しました！」

アイヌの民族衣装を着て登場したロン・モンロウさん。「たくさんのアイヌの文化、歴史を勉強できました」とウポポイ見学にご満悦。「アイヌ文様のマスクを買っちゃいました」と笑顔を振りまいていました。印象に残ったのはタレン

トなだけあり、民族衣装の多様な種類に驚いたと言っていました。中国の少数民族トゥチャ族生まれのロンさんは、展示品や古式舞踊、チセ、工芸、料理などに「親近感がありました」と感想を語っていました。ロンさんの持つ大きな発信力に期待！

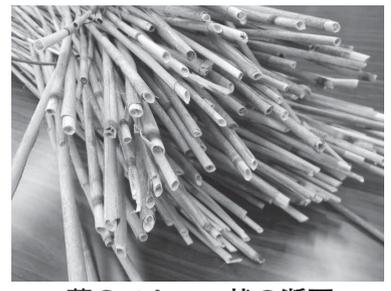


知っておこう アイヌ文化

スプキ(サルキ)

イランカラフテ。17世紀フランスの思想家、パスカルは『パンセ』の中で、「人間は自然の中で最も弱い一本の葦(アシ)に過ぎない。だが、それは考える葦である」と述べています。白老でも川原や湿地で見ることのできる葦ですが、風に吹かれるその姿は、自然に翻弄されながらも、常に思考しながら生きてきた人間の姿と重なるのかもしれない。

さて、アイヌ語で葦はスプキ(サルキ)と呼ばれ、茎を利用して、チセと呼ばれるアイヌ民族の伝統的家屋の屋根や壁を葺きました。地方によっては笹や樹皮を利用したチセもありますが、白老でも身近で、まとまった量を確保できた葦が利用されました。しかし、葦を使った茅葺きの家で果たして冬の寒さを乗り切れるのでしょうか？その答えは、葦の茎の断面をよく見ると、ストロー状の中空構造になっているため、葦を束ねて厚みのある壁や屋根とし、床は土の上に葦を敷き詰め、すだれとゴザを敷くことで、ある程度の保温効果を持たせることが可能となります。さらに、アペフチカムイ(火の神)の寝床である、チセの中央に設置された炉の火を絶やさないことも重要です。葦はその真っ直ぐで軽い中空構造を生かして、すだれや矢柄の材料としても利用されました。



葦のストロー状の断面

アイヌ総合政策課 アイヌ総合政策グループ 学芸員 森洋輔

問い合わせ先：イオル事務所 チキサニ ☎82-6301